

稲垣先生の思い出

尾形明子

昨年の八月、稲垣達郎先生が亡くなられた。八ヶ岳の山麓で先生の訃に接した時の衝撃は今も去らない。

信じられないことだった。いっお目にか

かっても、私たちよりはるかに若々しい好奇心に満ち、本のこと、展覧会や映画のこと、研究論文について、少しかすれた声で何時間でも話される。淡々とした話しぶりなのに、私たちは引き込まれ、何日かして、ふいに、その話が思いがけない熱っぽさで心の中に残っていることに気付かされる。

健啖においしそうに召上り、クラス会の

あとなど、何次会でもお付き合ひ下さる。そうした先生に、学生時代から二十年間、甘え続け、どのような時にも、先生はお元気で、いつでも私たちに応えて下さるもの

と信じ切っていた。八十歳を過ぎたお年を十分承知していながら、そのこの意味を一度も考えたことがなかったことを、改めて思う。

先生の研究室を初めて訪ねたのは大学二年の終りだった。早稲田の国文科は、当時三年になると卒論に合わせたゼミをとらなくてはならず、万葉集と近代文学の間で迷いながらの訪問だった。といっても、近代日本文学のもっとも優れた研究者としての稲垣先生を訪ねたわけではなく、先生は私の担任だった。

その頃の文学部には華やかな先生方が多かったし、表情豊かに情熱こめて学問や人生を語られる先生方に魅せられていたから、聞きとりにくい声で冗談も人生訓も言

われない先生の講義は地味過ぎて面白いとはいえないかった。

万葉と近代とどっちのゼミがいいでしょうという女子学生の問いに、先生はしばらくしてから笑い出された。「どっちもいいねえ。でも、せっかく来たんだから話してらっしゃい」——そうおっしゃりながらお茶を入れて下さった。

研究室を出ると夕暮だった。二時間余りも先生と向い合っていたことになる。その間、先生が何を話して下さったのか、今、私は全く覚えていない。ただその時、私は初めて、自分が大学生であること、大学が学問の場であること、ものすごい先生がいらっしゃることを体中で感じていた。講義の時と全く変わらない口調と誠実さまで私

ひとりのために、先生が文学を語り続けて下さったことに、涙ぐみたいほどに感動していた。しかもなんと楽しそうに文学や研究を語られることか。

数年前、先生を囲む会で、私はこの話をし、少しふざけて「だから、今、私がこうなってしまったのは先生のせいです」と申し上げた。即座に先生は「だから途中で、装幀家になるようになって勧めたのに。手先が不器用だって言うから」と言い返され、私の中に、もうひとつの夕暮が浮かび上がった。

卒業後、すぐ結婚してしまつた私は、また勉強がしたくなつて中井の駅近い先生のお宅を訪ねた。玄關脇の小さな部屋は、いつ伺つても本であふれていて、その本の山から次々と珍らしい本を出して下さる。絵のお好きな先生は装幀に大変関心をもつてられて、一冊、一冊本当にいとおしむように見せて下さる。そうした中で装幀家の折久美子さんの話が出て、その続きとして私に装幀の勉強を勧められた。「ブリュッセルにいい学校があるから、そこで修業したらきつといい装幀家になるよ。その方が

いいなあ——」

先生の言葉はかなり胸にこたえた。夕暮の急な坂道を歩きながら、私には研究は無理だつてことですかと、引き返して聞きたくなつた。

それからしばらくして私は大学院を受けた。一次試験後の面接は、稲垣先生と教育学部の川副國基先生だつた。それまで面識のなかつた川副先生の試問は厳しく、研究を本気でする気があるのかどうかに集中した。奥さん業の片手間に遊びに来られるのはたまらないと川副先生は思われたのだから。大した覚悟もない私は何度も答えに窮し、そのたびに稲垣先生がうなずきながら助け舟を出して下さる。そして最後にい卒論を書いてます、大丈夫、やれるでしょうとおっしゃつた。稲垣先生に保証されたことの恐さを、今頃になつて思う。

私の人生の節目節目に先生がいた。あたたかくて優しく、そして怖い方だつた。大学院に入って一時期、書くことが楽しくてたまらない幸福な時があつた。レポートというと百枚近く書いては嬉しがつていた。あるゼミの時、レポートを返して下さ

りながらひと言「半分にしたらよくなる」とおっしゃつた。同じような言いまわし、形容詞が全部チェックされ、原稿用紙は朱だらけだつた。

同じくゼミの日、田山花袋の「蒲団」を勢いよく批判し続ける私に「そんな風に切り刻んで何が生まれてきますか」と腹立たしうに言われた。

今の時代の、今の私の視点からのみ作家や作品を論ずるのではなく、まずその時代にまで戻り、作家の生に添いながら作品を読んでいくこと——研究者としての基本を稲垣先生に厳しく教えていただきながら、お約束した田山花袋論を末だまとめられないでいることの辛さを噛みしめている。

ベレー帽を被り、長身の背を少し丸めて、ふるしきに古本を包んで歩かれるとびきりダンディな先生の姿は、自然体のままでいながらしなやかに何かに抗していた。この思い出も半分くらいにしたらよくなるよ——そう笑いながらおっしゃりそうなきがする。